

心豊かな暮らし

縁

EN

VOL. 47
SUMMER 2018

yabashinoie





P.1-2 矢橋家住宅 新居

心豊かな暮らし
縁
EN

VOL.47 SUMMER 2018

contents

P 3 ≫
温故知新のリノベーション
矢橋家住宅 新居 — 岐阜県大垣市

P 9 ≫
ベトナムの技術力 銀細工 **nghe điêu bạc** (ゲドゥ バク)

P 11 ≫
リアルサイズの家 4シリーズ同時公開!
等身大だから暮らしが実感できる

P 13 ≫
史跡 赤坂お茶屋敷跡 牡丹園 茅葺門 葺き替え

P 14 ≫
うみゆり連載集
続巻を発刊
弊社社内報 「UMIYURI」

連載
中山道赤坂つれづれの記 文/故 清水春一
谷木因(六)



3



2



6



7



5



4



矢橋家住宅 新居
岐阜県大垣市

1

1 / 囲うように作られた中庭は、どの部屋の窓からも美しい緑が眺められる。
2 / 爽やかな緑を背景に、手づくりのお菓子でティータイム。 3 / 使いやす
いと満足しているキッチン、無垢板の木目が美しく、また使用部分は汚
れにも強いステンレスと、素材のバランスが良い。 4 / 大和天井は活かし、
以前は囲炉裏があった場所をフローリングに改修した。 5 / 白磁器に活
けられた牡丹園のシャクヤクが空間を飾る。 6 / 2人で集めた食器。一輪
挿しには季節の野花を。 7 / 芸術大学でリトグラフを専攻していた妻の
作品を飾っている。

温故知新のリノベーション

矢橋 龍樹
矢橋ホールディングス(株) 取締役

私の結婚をきっかけに、住まいをリノベーションしました。
改修したのは、建築家 早川 正夫氏により設計され、1986年に建てられた住宅部分。
縁あって、妻の父である建築家 横内 敏人氏の設計により改修しました。
「父が設計した家で育ち、住み心地の良さはよく分かっていたので、完成を楽しみにしていました」と妻。
自然素材をふんだんに使った住宅は、住むほどに味わい深く経年美化していきます。
庭との繋がりを大切にされている設計は、どの窓からも緑豊かで美しい庭が眺められます。
朝起きて、爽やかな庭が目に入ると心が落ち着きます。自然の中で暮らすことを日々実感し、これからの暮らしが楽しみです。



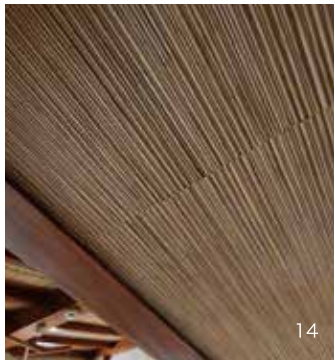
11



12



15



14



13



16

自然と文化を感じ、 書画骨董に親しむ暮らしを

矢橋家住宅は登録有形文化財(建造物)で、最も古い建物は築200年になり、そこに隣接する住居を改修しました。また、妻も祖父母がすぐ側の歴史ある建物に住んでおり、古民家暮らしは身近な環境でした。

「古民家の良さは知っていましたが、結婚して一緒に暮らし始めて驚いたのが、文化的に価値のあるものを日常的に使っていることです」と妻。

矢橋家では、家訓の一つである「書画骨董に親しめ」を大切に、書画骨董を暮らしの中に取り合わせて生活しています。季節の花を活け、絵を飾る。客人をもてなし、一服の茶を点てる…自然や人、芸術との繋がりが重要だと考えています。

「芸術大学でリトグラフを学んだり、仕事で美術品に触れる機会は多かったのですが、暮らしの中で実際にそれらを活用することによって、そのものが持つ美しさや、価値を改めて感じられるようになりました。これまで気がつかなかったことを大切に、新しい暮らしを楽しみたい」と、妻が微笑みます。

大工や職人の確かな技術と 丁寧な手仕事

1986年の建築当時、矢橋林業の建築技術を駆使して、様々な試験的材料工法を採り入れました。今では貴重な材となった良質なトチの無垢材をはじめ、ヒノキ、マツ、ナラ、クリなど多種類を使用し、室内木部の大部分には漆塗りが施されておりました。建築から約30年経過し、技術力に磨きの掛かった職人の手により行われた改修は、古きものを生かし、新しい技術や知識を取り入れた温故知新のリノベーションとなりました。

8／居間と庭の間のウッドデッキでは、爽やかな風を感じて寛げる。9／ダイニングには、矢橋工房の漆塗りテーブル。今では貴重な材となったトチの無垢板収納も漆仕上げ。チェアは横内氏がセレクトした北欧家具。10／居間。飾り床の壁紙には、貴重な唐長(日本で唯一、江戸時代より代々続いてきた京都の唐紙屋)の唐紙を使用している。11／庭の樹木は、新緑や秋の紅葉が楽しめるヤマモミジや、春の訪れに香りを感じるジンチョウゲなど。常緑で刈り込みが不要なタマリユウを敷き詰めている。12／天井はそのままに、和室だった部屋を洋室に改修した寝室。目隠しにもなる壁と造作収納を新設。13／以前からある、祖母の着物の生地を貼った襖。14／居間天井の下がり部分には、横内氏の住宅の特徴でもあるヨシ素材を。15／改修前から使用していた大理石の大塊を削って作った浴槽は、保温性に優れている。16／引き出し収納のついたソファの設計も横内氏によるもので、自社で製作した。クッション部分にウィリアム・モリスの美しいデザインの生地を採用。引き出しには膝掛けを入れるなど、リビングでスッキリと過ごせる工夫が。



9



8



10



「若王子の家」 撮影：新建築社 写真部



「奥庭の家」 撮影：小川 重雄



「若王子のゲストハウス」 撮影：畑 亮



「風突の家」 撮影：小川 重雄

建築家紹介



横内 敏人
Toshihito Yokouchi

主な経歴

1954年 山梨県甲府市生まれ
1978年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1980年 マサチューセッツ工科大学建築学科修士課程終了
1981年 アーキテクチュアル・リソース・ケンブリッジ勤務
1983年 前川國男建築設計事務所勤務
1987年 京都芸術短期大学専任講師
1991年 横内敏人建築設計事務所（一級建築士事務所）設立
1994年 京都造形芸術大学 環境デザインコース助教
2005年 京都造形芸術大学 副学長
2013年 京都造形芸術大学 環境デザイン学科特任教授

主な受賞歴

1992年 山梨県建築文化賞 「飯島邸住宅」
1996年 京都市芸術新人賞
2001年 山梨県建築文化賞 「石和の家」
2004年 木の建築賞 「若王子のゲストハウス」
2008年 京都府文化功労賞
2014年 山梨県文化賞 建築文化賞「屋形の家」
2015年 三重県建築賞 知事賞「五十鈴川の家」

私が設計するものはほとんどが住宅です。住宅は規模は小さいのですが、建物と人のかかわりはとても深く、それだけにいいに設計をしなければならぬと考えてます。住宅の設計は人を驚かしたり、人に強い刺激を与えたりするのは望ましくなく、穏やかで長く住んでも飽きることがない上質なものでなければならぬと考えています。たまにしか行くことがない美術館やレストランならばその時だけその空間を楽しむだけなので、多少刺激が強く非日常的な空間の方が良いかも知れませんが、住宅は毎日暮らす場所ですし何十年もの長い間使う建物ですので、むしろひかえ目でどこがいいのか分からないけれど、ずっとそこに居たくなるような空間が最も良いと考えています。そこに住宅設計の奥深さと難しさがあります。それは味付けが濃い料理をつくるのは簡単ですが、毎日食べても飽きのこないうす味だけで美味しい料理をつくる方が難しいのと同じことかも知れません。

また素敵な家づくりには庭と緑の存在が欠かせないと考えています。科学技術を基盤とした現代の文明がいかに発展したとしても人の遺伝子は太古の昔と何ら変わることはありません。人の身体も自然の一部であり、自然を身近に感じながら生きることではじめて心の底からの満足が得られるのではないのでしょうか。日本は戦後数十年で見事に復興をはたし世界でも有数の豊かな国になりました。これからはこの物質的豊かさに見合うだけの精神的に豊かで美しい国をつくらなければなりません。そのために住宅が果たす役割は大きいと考えながら、日々の設計活動を行っています。

横内敏人建築設計事務所

〒606-8444
京都市左京区若王子町68番地
Phone 075-761-1976
Fax 075-752-3530
<http://www.yokouchi-t.com/>

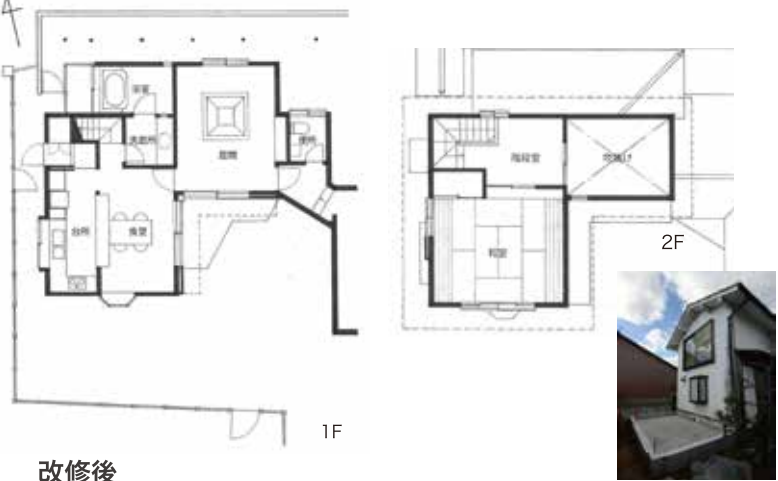


撮影：畑 亮

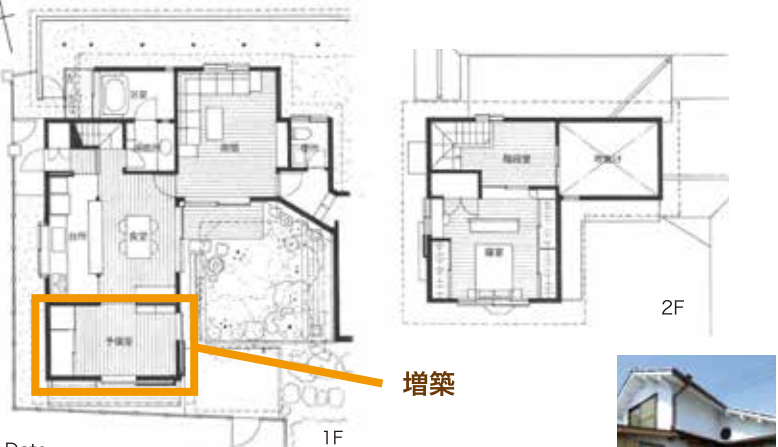


17

改修前



改修後



増築

Date
所在地:岐阜県大垣市 / 家族構成:夫婦
敷地面積:3,560㎡ / 延床面積:109.46㎡
竣工:2018年4月 /
設計:横内敏人建築設計事務所 / 施工:矢橋林業株式会社

17 / 外と内の間には、開口部が大きな窓を。木製建具を使用することで、素材の違和感がなくなる。横内氏の住宅には欠かせない特注のロールスクリーンは、断熱性を兼ね備えている。 18 / 将来の子供部屋にも使えるようにと、新たに増築した部屋からも緑が。収納棚も自社で製作。



18

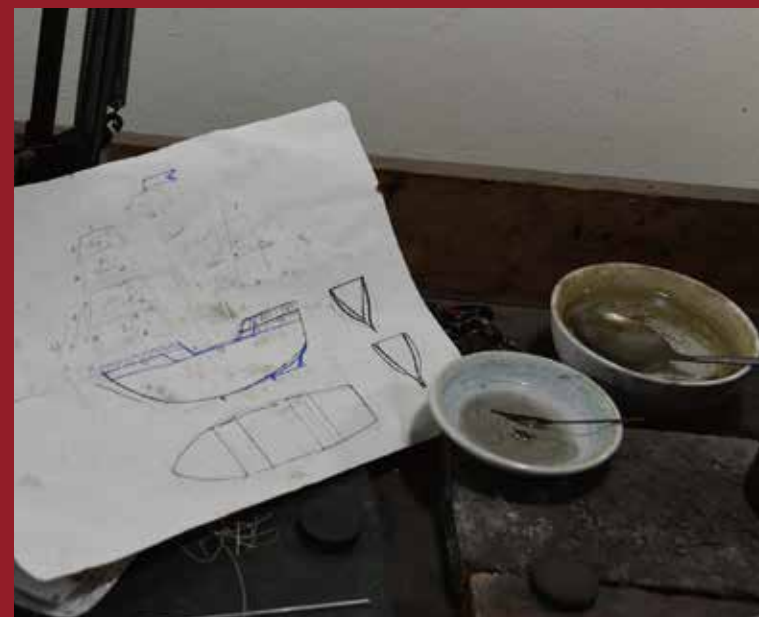
Vietnam Art
ベトナムの技術力
銀細工



ゲドゥ バク = 銀細工

nghe đạu bạc

独特で繊細さが求められる銀細工。ひとつひとつ手で丁寧に仕上げていく。
ベトナムでの銀細工の歴史は古く、およそ800年とも言われている。
この伝統的な職人技は、先祖代々受け継がれていることが多いが、今では、その職人の数も減りつつある。
そんな中、この伝統を後世へ受け継いで行こうと技術を身に付けるため日々取り組んでいる若者たちもいる。

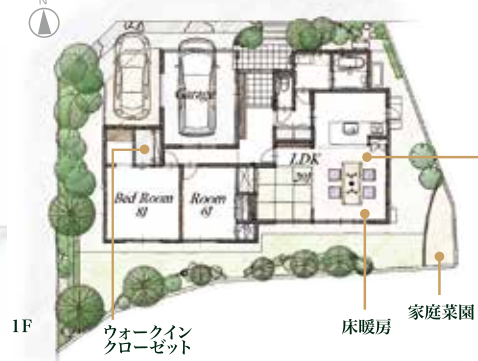


落ち着いた空間でくつろげる平屋

2LDK / 駐車2台可能 / インナーガレージ
畳コーナー / リビング勾配天井無垢板張り

耐震等級 **3**
長期優良住宅
オール電化仕様
太陽光発電
対応住宅

敷地面積 228.03㎡ (68.97坪)
施工面積 123.39㎡ (37.32坪)
1F床面積 104.34㎡ (31.56坪)



矢橋オリジナル無垢フローリング
Nagomi

子どもを規則正しい習慣に導く家

3LDK / 駐車2台可能 / 畳コーナー
子ども導線(ただいま収納シリーズ) / ウッドデッキ

耐震等級 **3**
長期優良住宅
オール電化仕様
太陽光発電
対応住宅

敷地面積 239.84㎡ (72.54坪)
施工面積 137.46㎡ (41.58坪)
1F床面積 65.28㎡ (19.75坪)
2F床面積 54.65㎡ (16.53坪)

子育て生活応援住宅
子ども導線



矢橋オリジナル無垢フローリング
Walnut

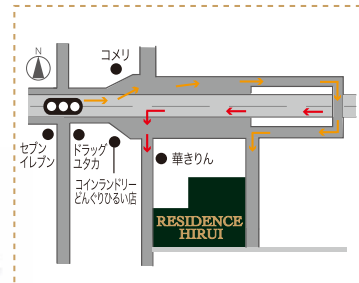
パースはイメージです

麗しき住環境の創造
～Residence series～



会場

RESIDENCE HIRUI
岐阜県大垣市昼飯町420



注文建築用自社土地の資料もございます
[大垣市内:20区画 垂井町:5区画]



リフォームや建て替えでお困りの方もご相談ください！

矢橋のリノベーション

使い心地を良くするキッチンや浴室などの

小さなリフォーム

から

新たな付加価値を付け家を甦らせる

フルリノベーション

まで

Renovation
甦



SHOU

NAGOMI

YUURAKU

OU

住宅展示場(モデルハウス等)では、体感することができない、プラン・設備・仕様がご覧頂けます。



等身大だから暮らしが実感できる

リアルサイズの家

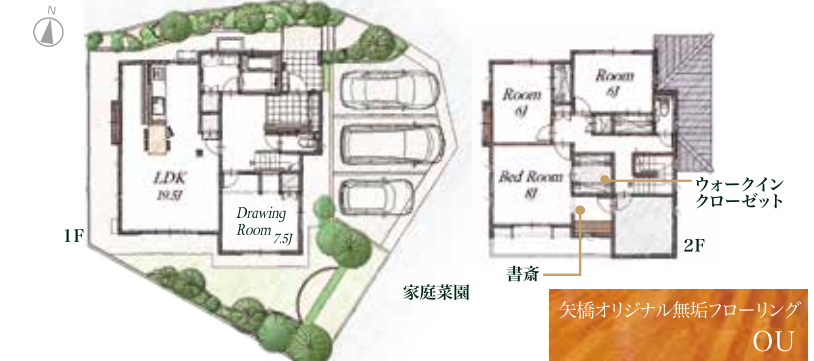
4シリーズ同時公開！

クラシックホテルのような佇まいに住まう

4LDK / 駐車3台可能
市松模様 無垢フローリングの応接室

耐震等級 **3**
長期優良住宅
オール電化仕様
太陽光発電
対応住宅

敷地面積 204.46㎡ (61.84坪)
施工面積 145.18㎡ (43.91坪)
1F床面積 70.11㎡ (21.21坪)
2F床面積 65.14㎡ (19.70坪)



矢橋オリジナル無垢フローリング
OU

空間の悠を楽しむ

4LDK / 駐車3台可能 / 吹き抜け
矢橋オリジナルキッチンカウンター / 全熱交換24時間換気システム

耐震等級 **3**
長期優良住宅
オール電化仕様
太陽光発電
対応住宅

敷地面積 198.57㎡ (60.06坪)
施工面積 142.07㎡ (42.97坪)
1F床面積 65.42㎡ (19.79坪)
2F床面積 53.83㎡ (16.28坪)



矢橋オリジナル無垢フローリング
Yuuraku

うみゆり連載集 中山道赤坂つれづれの記

いつも弊社の「季刊誌 縁」をご愛読頂き、誠にありがとうございます。

毎号、本誌の巻末に掲載しております「うみゆり連載集」は、1973年～2008年までの間、弊社の社内報「うみゆり」にて清水春一先生が書き記された数々の歴史の物語です。

2006年に一度、原稿を纏め「うみゆり連載集上下巻」を発刊し、その後、先生が逝去されるまでの3年間、連載を頂いた原稿をこの度、続巻として発刊致しました。

上下巻の発刊から既に12年の歳月が経ちましたが、この度、先生が逝去されてから10年の節目に発刊致しました。清水先生のご恩に報いると共に、地元赤坂の歴史を後世に伝える一助となれば幸いに存じます。



清水春一(しみずしゅんいち)
郷土史家
1916年大垣市赤坂町に生まれ、新聞記者や赤坂町会議員、大垣市職員を務められる傍らで郷土史を研究。1988年 県芸術文化奨励・大垣市功労賞、1994年県教育文化賞を受賞。2003年には、文部科学省より地域文化功労者(文化財保護功労)に選ばれている。矢橋グループの顧問も務めた。
2008年4月 逝去



うみゆり連載集 続巻



うみゆり連載集 上下巻



発刊当初の弊社社内報「うみゆり」

読むと元気になる社内報 UMIYURI

1970年から発刊を続けてきた矢橋グループの社内報は、500号を超え、現在も会社の出来事、各国の情報、社員の趣味、結婚、出産などを掲載し、発行を続けております。

企画から制作、印刷まで全て社内にて行っており、全社員が内容を共有できるよう、グループ会社があるベトナム、韓国、ミャンマーの各国語版も社員が翻訳し、発行をしております。



ベトナム語



韓国語



ミャンマー語



承 継

「心豊かな暮らし」を住宅の理念として掲げて、家づくりを致して参りました。家は家族の営みがあり、子どもが育つ場でもあります。

温故知新を原則として日本人が日本人らしく育つ家と風景をつくることが、矢橋林業の使命だと思っております。

前々回の弊社社員のお施主様に続いて、今回は本誌に、私の自宅の一面に息子夫婦が住む家のリフォーム例を掲載致しました。

この度、良きご縁が繋がり、横内敏人先生の仕事をさせて頂く事となりました。いつか、横内先生の仕事をさせて頂きたいと願っておりましたが、最初の仕事が先生の娘さんと私の息子の家になろうとは想像すら出来ませんでした。

横内先生の目指しておられる事も、僭越ながら我々が志している物も同じ方向にあり、幸いなことに、この家に住むことによって先生と私の志は生活の中で次世代に受け継がれていくのだと思います。

受け継ぐことの難しさは、発展途上国から先進国への発展を続けるベトナムも同じです。物質的な豊かさが増していく中で、効率が優先され、伝統工芸の存続も危機に瀕しております。一昔前には、村全体が銀細工の村であったのが、今では一軒のみとなってしまいました。人にしか出来ない心のこもった美しい手仕事を残していく、本当の豊かさは未だなく、かつての日本がなくなっていくように、ベトナムも同じ道を歩いているように思います。我々は微力ではありますが、少しでもベトナムの伝統工芸が残るよう、日本で紹介する場を持っていきたいと思っています。また、無くしてはいけない物として我々が取り組んでいるのは地方史です。伝承されるのは正規の話であり、地方の言い伝え、庶民の話などは文書にならず、消えていくことが多いと思います。清水春一先生が残して下さった弊社社内報「うみゆり」の原稿の内1973年～2006年までの原稿は既に書籍として発刊しましたが、2006年～2008年までの原稿が未掲載となっておりますので、残りの原稿をまとめ、続巻として発刊致しました。前回の製本に比べ、ささやかではありますが、清水春一先生が我々に残したかった赤坂にまつわる歴史を、後世に残すことが出来ました。ご用命賜われれば謹呈申し上げます。

社会が発展し、技術が革新されていく中、人が蓄えてきた文化、伝統技術、歴史を継承していくことの難しさを感じております。しかし、弊社は挑戦を続け、技術を革新していくことを目指しながら、温故知新の基、継承しなければいけない事、残していかなければならない物を、大切にしたいと思っております。

矢橋林業株式会社代表取締役
社長 矢橋龍宜



史跡

赤坂お茶屋屋敷跡 牡丹園 茅葺門 葺き替え

牡丹の時期に大勢の方々にぎわう牡丹園。
この度、入口の茅葺門を伝統的な技法で葺き替えました。

当園は、牡丹の季節だけでなく、新緑や紅葉、雪景色、冬に咲く寒牡丹など、一年を通して自然の美しさを感じて頂くことができます。門は一年中開け放しです。心おきなくご来園頂き、四季の移ろいを感じてください。



WINTER



AUTUMN



SUMMER



SPRING

谷木因(六)

うみゆり連載集 中山道赤坂つれづれの記 故清水 春一

本年(二九八八年)秋、「奥の細道三百年記念」の俳文学大会が大垣で開催され、全国の関係学者の先生方が三百名ほども来訪されます。これに伴って、芭蕉の遺跡史跡のある市町村の人々による「奥の細道サミット(仮称)」が大垣市の呼びかけで開催されることになりました。お互いに古典文学に親しみながら、新しい時代へ向けての発展活性化を期待しようということとは誠に意義あることと存じます。

六十歳の遺言状

俳聖芭蕉と肩を並べた谷木因は、立派な文学者であり企業人であり、歴史上に不朽の名を残しました。その彼もまた、平凡な人間としての二面のあったことを窺うことのできる資料として、手紙の二つをここに紹介いたします。

此世之名残申置候

「貴丈御事、先交慰文已来別而申談候。貴丈別而御懇情二候。我等此度つき世の隙あけ、未来之行脚二及申候。同名旦次郎二赤坂田地不残ゆずり、其外隠居屋之分相渡候。いまだ幼少二候。貴丈御息女之内二番目に

ても吾人御縁組被成置。成人之後二世帯御取立、御有付被成間敷候哉。旦次郎母は我等勝手者二而候。剃髪させ兩人の親分後見二養せ候へば、一身躰御取立二而候故、御相談申置候。是も不入物と思召候へば、其元田地之事、惣次郎殿は一家と申、貴様は御懇と申、御兩人二而旦次郎廿歳迄二及候迄、作徳米年々損不參候様二御世話奉頼候、其後ふく田園右衛門など御相談候而、旦次郎身体かたまり、母も桑名おさん迄宜様二奉頼候。是一生之頼二而候。以上。

宝永丙戌七月

矢橋藤十郎様

竹中惣次郎様

木因(花押)

この手紙は、木因の末裔に当たる山下つなさんが所蔵しておられたのを、先般大垣市へ寄贈された貴重な資料のうちの二点で、木因が六十一歳のとき、宝永三年(一七〇六)七月に書き残したものです。「此の世の名残に申し置き候」とあつて、遺言状のように受け取れます。宛名は赤坂の矢橋家の当主で芭蕉、木因の弟子として俳諧に取り組んでいた矢橋藤十郎(俳号木巴)と、竹中惣次郎の両名となっています。竹中惣

次郎という人は、今のところ調査不十分でいかなる人かよくわかりませんが、恐らく、木因が幼少のころ後見してもらっていた赤坂の竹中夫妻の世嗣ぎである竹中家の当主ではなからうか、と察せられます。ともあれ、その兩人に対し旦次郎の後見人として、お世話になりたいと依頼していることがわかります。

この「旦次郎」の「旦」というのが、同名とあるので木因の姓の「谷」のことです。「いまだ幼少」であり、その母は「我ら勝手の者」と書かれているのは、系図や過去帳にも、それらしき名前がみつけれぬので、恐らく正式の縁者ではなく、いわゆる日陰者と呼ばれる妾(愛人)であつたらうと察せられます。その子旦次郎のために、赤坂に所有している土地すべてと自分の隠居所の家屋敷を譲り渡したので、木巴の次女と旦次郎を結婚させてやってほしい、そして、旦次郎の母は出家させて若夫婦の後見役にしたいといっています。木因が「勝手の者」に生ませた子が二十歳になり成人するまでの行く末を、矢橋、竹中両氏に依頼している手紙です。

この手紙が素晴らしく達筆で認められてい

て、他の書翰類の筆蹟と変りはないのですが、なぜか、「標題と相俟つて異状であり、あるいは、このころ大病でもしたのか」と東大教授森川昭先生も、その著書『谷木因全集』の中で指摘しておられるとおりです。享保十年(一七二五)九月三十日に八十歳で永眠するまで、その後二十年ほども元気で俳諧活動が続けていて、いろいろと娑婆の苦楽を味わいながらも、誠に逞しい生涯であつたことが偲べれます。



矢橋林業株式会社

この冊子は、健康面、環境に配慮し作成しております。